稲取大川水系の特徴

治　水

・ 稲取大川は、県が管理する 1.2km の全区間にわたり急勾配で流下する２級河川である。0.7 km付近を渡河する国道 135 号より下流には、沿川に家屋が連担している。

・ 昭和 33 年の狩野川台風や昭和 50、51 年の豪雨による浸水被害や河川施設被害を受け、災害復旧事業などにより河川の整備が行われてきた。現況河道は、年超過確率 1/30 程度の降雨に対応した流下能力を概ね有しており、近年、浸水被害は報告されていない。

・ 施設能力以上の洪水が発生し氾濫した場合でも、できる限り被害を軽減するため、「自らの命は自ら守る。自らの地域はみんなで守る」とする東伊豆町の防災対策と連携し、ハードとソフトが一体となった減災対策に取り組むことが重要である。

・ 稲取大川の津波対策は、静岡県第４次地震被害想定における施設計画上の津波高さ（Ｌ１）では、河川への津波遡上による被害が想定されているが、稲取地区では、観光や景観への配慮から施設のかさ上げによるハード対策は当面行わず、警戒避難体制の整備等のソフト対策を進める方針が地区協議会で示されている。最大クラスの津波（Ｌ２）対策も含め、東伊豆町の津波防災地域づくり等と連携した対応を図っていく必要がある。

利　用

・ 稲取大川には、水利使用に関わる河川法の許可はなく、農業用水等の慣行水利もない。

・ 稲取大川のほとんどの区間は、1：0.5 勾配のコンクリート護岸が整備された掘込の河道形態で、川床に容易に降りることができる箇所はない。

・ 現状では、目立った河川利用は認められないが、稲取地区の中心地である下流域では、河川と住宅が近く生活空間と密接であることから、住民が河川の様々な姿に関心を寄せることが求められる。

環　境

・ コンクリート護岸の河道であるが、玉石や礫が河床に堆積する箇所が分布し、河口から上流部までに礫底を好むニホンウナギやハゼ類などの魚種が確認されることから、礫河床の保全、創出に配慮することが必要である。

・ 上流部には、渓畔林により形成される水辺環境があり、重要種であるオカダトカゲが確認されていることから、河川の背後地との連続性にも配慮する必要がある。